

広報 すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

{ 4 / 15 }
平成29年(2017年)
No.2201

詩人、杉並に
85年住まう。

多くの人が人生の中で一度は出会う、
谷川俊太郎さんの詩。その中には、
生まれ育った杉並のことを詠んだもの
が数多くあります。

戦前から戦後、そして現在。杉並に居
を構えて過ごしてきた谷川さんにとっ
て、このまちはどんな場所なのでしょう
か。懐かしい杉並の姿がよみがえる
ような、少年時代の思い出なども交え
て、お話をお聞きしました。



特集



すぎなみビト

谷川
俊太郎

Contents — 主な記事 —

6 | 5月は杉並区春の自殺予防月間 7 | 杉並区就労支援センター 8 | 中学生・高校生の力で企画・活動しませんか 10・11 | なかま集まれ! 16 | 海外へ発信 すぎなみの魅力

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🌐 区ホームページ: <http://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。



すぎなみピト



interview

谷川 俊太郎



プロフィール：谷川俊太郎（たにかわ・しゅんたろう）。詩人。昭和6年東京府豊多摩郡杉並町（現・東京都杉並区）生まれ。昭和27年第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。昭和37年『月火水木金土日の歌』で第4回日本レコード大賞作詞賞、昭和50年『マザー・グースのうた』で日本翻訳文化賞、昭和57年『日々の地図』で第34回読売文学賞、平成5年『世間知らず』で第1回萩原朔太郎賞など、受賞・著書多数。詩作のほか、絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広く作品を発表。



宇宙がふるさとだと思っていた。だけど…

—谷川さんにとっては杉並がふるさとですか

子どものころは、夏を過ごした浅間山のおもとの家が、ふるさとっぽかったね。自然がたくさんあってね。

最初の詩集は『二十億光年の孤独』。そのころのぼくは、ローカルなものに興味や執着がなくて。宇宙が自分のふるさとだと思っていたから、日本も杉並もふるさとではなかった。だから、杉並は、ずいぶん長い間ふるさとっぽくなくてね。

だけどね、それがなじんできたんでしょね。中年を過ぎたころから杉並

ここ・杉並
生まれてからずっとここに暮らしている
もう七十年を超えたが
根を下ろしているかと問われると心もとない
言の葉は空へとひろげているかもしれないが
若いころは無限の宇宙の一隅だった
界隈には名だたる文人たちもおられたようだ
私はケヤキの枝越しに青空見つめて
火星からの通信を待っていた
いまではそれなりに居心地のいい巣穴
かつて田んぼいま建売のこの地の下に
縄文以来の祖先の暮らしも埋まっているが
他意はないけど私は多分ここには骨は埋めない

燃えないゴミに燃えるゴミ資源ゴミに粗大ゴミ
集積所を通り過ぎる日々の流れの無常迅速
腕白だった川は銅い慣らされても
昔ながらの速度を保っていて
その堤に春になれば桜も咲いて富士も霞んで
行きつけの床屋 顔見知りの宅配青年
イタリーやインドやタイの出店もたくさん
並木道に異国の言葉も聞こえてくる
阿波踊りや七夕祭りの雑踏を抜けると
四つ角の塀のうえ野良猫がアクビしている
とまれ私はここから世間に打って出て
毎夜この巣穴で幸せに眠る
「詩の本」谷川俊太郎著（集英社）より



谷川さんの詩には、たびたび「杉並」が詠まれています。

居心地のいい巣穴。でも杉並は、ずいぶん長い間 ふるさとっぽくなくて。

どんなじいさんの中にも赤ん坊がいる。

—谷川さんは、区内の小学校で子どもたちに講演をする機会もありますね。
詩を朗読すると、こっけいな詩のはずなのに大人が“しーん”としていて反応しないことにびっくりしますね。子どもは“げらっ”と笑うんですよ。『ゆうぐれ』という詩は、「ゆうがた うちへかえると とぐちで おやじがしんでいた」と始まって、おふくろもしんで、あにきもしんで、と続く詩なんだけど、大人は本気で受け取るから全然笑わない。でも子どもは大笑い。これがユーモアだと分かる感性を持っているわけです。

でもぼくは、人間の年齢を年輪みたいに考えていて、中心に生まれたばかりの0歳の自分がいて、だんだんと年輪が増えていって、一番外側に現在の自分がある。どんなじいさんの中にも赤ん坊はいる、そんなイメージ。大人は社会に出て子どもっぽかったら困る訳だから、自分の中の子どもを抑圧して生きているんじゃないかなと思いますね。

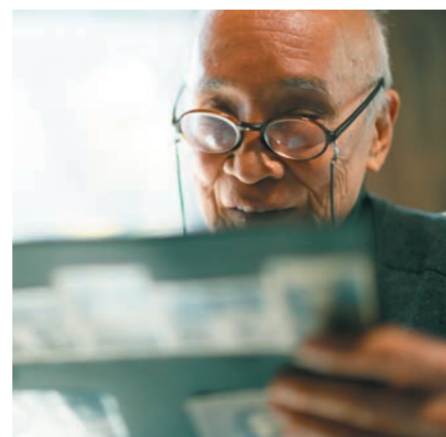
田んぼをじゃぶじゃぶ歩くのが楽しかった。

—谷川さんが過ごした杉並のまちはずいぶんと変わりましたね。
一番印象的なのは、家から見えていた富士山が、あるとき見えなくなったこと。戦後間もなく阿佐ヶ谷団地ができて、建物が増えて、景色が変わって

いったね。パルセンターなんてのはなくて、舗装されていない泥道が駅まで続いていて。子どもだったけど、通りにあった明治屋さんがとてもしゃれていたのが印象に残っていますね。小学校へ通う道は田んぼ道。冬は凍った田んぼの上を突っ切っていったし、台風の季節は水没した道を、学校までじゃぶじゃぶ歩いていくのがすごく楽しかった。家の周りには田んぼや畑。隣の家の兄貴分にくっついて、よく模型飛行機を飛ばして遊びました。

乗り物も、生活の便利さも大きく変わって、少年時代は路面電車、ティーンエージャーになったころには、アメリカ軍払い下げのごつuitトレーラーバス、そして、地下鉄ができて、ぼくもいつかから自分の車に乗るようになりました。

東田町（現成田東）の運動会で1等でゴールする谷川さん（昭和18年）



がふるさとっぽくなってきて。家に帰るのがだんだん、だんだんと楽しみになってきますね。外で仕事をして、人と付き合っ、家に帰ってひとりになる。落ち着きますね。

そんなことを振り返って読むと、『ここ・杉並』という詩は、自分でも正直に書いてある詩だと思いますね。

毎日の散歩は善福寺川沿い。

70歳を過ぎてからかな、近所を散歩するようになって、今はわりと毎日歩くようにしていますね。善福寺川沿いは自然が残っていて、大好きです。うまく景観づくりがされていて、気持ちがいい。公園みたいところで休んだり、何かを眺めたり。ひっきりなしに工事をしているのもまた、面白い。きのう通れた道が今日は通れないとか、びっくりしたり。風景が変わっていくのが面白くて、よく見えていますよ。

最後にメッセージを、とお願いと、「僕はメッセージでもんが嫌いな、やっぱり上から目線でしょ。自分の知らない不特定多数に向かって何かを発信するというのは、ぼくには詩のかたちでしかできないから」。そして、「だからそういうときは『電気は、小まめに消しましょう』って言うようにしています。なんだかメッセージらしく聞こえて、いいでしょ」。谷川少年がにこっと笑った気がした。

誰もが一度は触れたことのある谷川作品

- 『スマイリー』レオ・レオニ（作）／谷川俊太郎（訳）／好学社
- 『ここもここもここ』谷川俊太郎（作）／元永定正（絵）／文研出版
- 『あーん』下田晶克（絵）／谷川俊太郎（文）／クレヨンハウス
- 『二十億光年の孤独（愛蔵版詩集シリーズ）』谷川俊太郎（作）／日本図書センター

もうすぐ、谷川さんが好きな季節、初夏がやってくる。裸になってもいい季節が待っているという感覚が好きなのだそうだ。
今、谷川さんにとって、杉並は、どうやらふるさとっぽい、それなりに「居心地のいい巣穴」らしい。あなたにとって、「ここ・杉並」はいったいどんなまちなのだろうか。

谷川さんのすぎな場所

毎日の散歩エリアをはじめ、本と縁の深い谷川さんならではの場所を教えてください。

- 座・高円寺
舞台芸術作品の上映など地域に根差したさまざまな文化活動の拠点です。 <http://za-koenji.jp/>
- 善福寺川緑地周辺
美しく整備された遊歩道には、自然があふれています。
- 個性的な本屋さん
カフェと一体となっていて、ライブや展示も開催される新しく面白い本屋さんです。

① 中央図書館に隣接する「読書の森公園」（荻窪3-39-16）には、谷川さんの作品が記された絵本型のモニュメントがあります。

詩の朗読と音楽「谷川俊太郎の世界」

8つの会場で展開するまちづくりと人づくりのイベント「阿佐ヶ谷アートストリート2017」に谷川俊太郎氏が登場します。ご子息・賢作氏のピアノを背景に自作の詩を朗読します。

●日時：4月28日（金）午後7時 ●場所：久遠キリスト教会礼拝堂（阿佐ヶ谷北2-25-8）

チケット情報はコチラ！

〈費用〉前売券・当日券 各3000円
〈申し込み〉チケット販売窓口=TiGET <https://tiget.net/events/9431>
コミュカルショップ(区役所1階)
〈問い合わせ〉阿佐ヶ谷アートストリート実行委員会・山本 ☎3313-1925